

きずな

第25号

発行平成23年8月1日

まちづくりパワーアップ出会いフォーラム



体験受け入れが始まりました

町からの委託事業で行われています、まちづくりパワーアップ出会いフォーラムでは、市民活動を体験してもらおうと、2回の市民活動講座を受講した団体で体験受け入れを承諾くださった6団体を並び、体験受け入れ発表会を実施しました。各団体とも、自分たちの活動を紹介しながら体験のメニューをパワーポイントを使って、上手にアピールしていました。その場で体験申し込みをしてくれた方その他に、少数でしたが個別質問に残って納得いくまで話していた方もいて、市民活動に参加しようとする熱心さがうかがわれました。

今回の体験が功を奏して、それぞれの活動に結びつく事を祈って、各団体の体験活動が始まります。この発表会に参加出来なくても、体験する事が出来ますので、体験したい方は、まちサポにお申し込みください。

今回の選考基準は6つ、①その活動が町の活性化に繋がるものか。②その活動が現実的かどうか。③年間を通して活動出来るのか。④多くの方が参加することができる活動か。⑤組織がしっかりと

しているか。⑥来年度以降にも繋がる継続的な活動かどうか。

この6団体が以上の条件を満たしていましたので、体験を受け入れて頂く事になりました。



体験受け入れ団体	活 動 内 容
オープンガーデン大網白里	花を愛する気持ちを共有し、お庭を公開、住民相互のコミュニケーションを図り環境緑化に貢献する活動
大網白里子育て支援ネットワーク協議会	「エコパーク大網白里子ども村」の見守り、自然遊びの指導などの活動
大網白里まちあるきお助けマップ	現在、いろいろなウォーキングマップが出ていますが、それらを検証して、1枚の地図にまとめ発行する活動
九十九里振興社	体験農業の運営・管理の活動
児童館設立プロジェクト	親子広場（参加者は乳幼児と保護者）のびのびくらぶ「ゆめの木」で見守り活動、お話のボランティア
つまみ食いウォーク	大網白里町の商店街活性化のための、商店街を歩き隠れた大網白里町の魅力を発見する活動

大網白里まちづくりサポートセンター

健康まつりに参加して

NPO法人地域医療を育てる会

理事 大野英雄

7月7日、大網白里町保健文化センターで「健康まつり」が開催されました。大網白里町、山武市にお住まいの方々にもっとも健康になってもらいたいという主旨で、テレビやラジオでご活躍の吉田たかよし先生を招き、体操コナー、健康金メダル、Q&Aコナー、最新技術を使ったパネルディスカッションなど盛りたくさんのメニューがありました。

おかげ様で大網白里町、東金市、山武市など総勢86名が参加する中、大変有意義なシンポジウムを開催することが出来ました。

体操コナーではインストラクターの先生により参加者全員が30分間の軽い運動をして身体をほぐしました。次に、健康金メダルでは7名の高齢者の方が舞台上上がってそれぞれ実践している健康自慢を発表して頂きました。健康自慢するだけあって、ものすごく元気な方々でした。

食養生による食事法、高血圧にも関わらず病院にお世話にならない人、テニス大好きな人、犬の散歩を楽しむ人、ストレッチを教えている人、気功のプロフェッショナル、長寿法など発表された人は、皆さん高い目標をお持ちで、生き方上手という感じを受けました。金メダルを受賞したNさん(84歳)は、賞品を被災地に寄付してほしいと辞退されたのには、本当にびっくりしました。

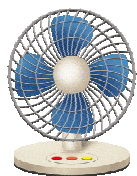
Q&Aでは認知症にならないために何をすれば良いかとの問いに対して吉田先生は「何

かに集中する、傾倒する」ことは効果があると応えて頂きましたが、多くの方が納得していたようです。

パネルディスカッションでは、ウェアラブル環境情報ネットワーク推進機構の板生理事長から最新技術の紹介、地域医療を育てる会の藤本理事長から予防医療の大切さ、テニリバースの十川様から腹6分目の食事法の力強いアピールがありました。



セミナーにご協力いただきました山武市、大網白里町、地域医療を育てる会、園芸デザインサポ、まちサポの皆さまには心から感謝いたします。



旭に扇風機を

旭津波被災者支援センターに

扇風機をお届けしました。

東日本大震災による旭飯岡津波被害に大網白里からも物資支援・ボランティアに行かれました。整備が進み、旭市の支援物資の受け入れは五月十五日で打ち切りに。しかし、飯岡地区の壊滅的被害のあった方々には支援が必要でした。飯岡まちおこし実行委員会(代表磯野氏)が民間で「旭津波被害者支援センター」を発足、磯野氏より九十九里サロン(九十九里地域再生・環境保全寄与団体)の総会で「自転車と扇風機が必要」とお聞きし、まちサポで募りました。当町役場企画政策課で

も放置自転車等あたっていただきましたが成果なく、扇風機六台を七月二十六日にセンターに届けました。

センターは飯岡の安藤時計店さんで、ご自身も津波で首までつかり一命をとりとめ、お店も被害に遭われた中、義援の荷受所になり、復興に向け奔走されています。

ある一人暮らしの高齢者のかたは、家が使えない状態なのに、家を取り壊し、心配する息子さん夫婦に引き取られて行ったのですが、慣れない土地で話し相手もなくかえってストレスとなり飯岡に戻って来たが、住む家もなく仮設住宅で暮らしているそうで、安藤さんは、津波にあってもその土地で暮らせるようにしたいと強く思ったそうです。「住み慣れた家・土地で過ごしたい」は復興の原点であると直接お話を伺い強く感じました。

センターの中心の一人、平塚四郎さんは、東北ばかりに目が向きますがまだまだ旭飯岡にも向けていたきたいと、海岸沿いでアイスクリーム屋さんを始めたお店を案内していただきながら話してくださいました。

九十九里があらためて繋ぎ合う機会です。何度か訪れた海岸線、心から復興して欲しいと、大好きな九十九里の海を眺めて思いました。(担当 林正清子)

郷土の歴史-2

古山 豊 (郷土史研究会会長)

終戦六六年—米軍九十九里浜上陸作戦

「元禄の巨大地震と大津波」は、一回パスし次号から再開します。

「1人の死は悲劇だが、数百人の死は統計に過ぎない」と言ったのは、ナチス党高官のユダヤ人担当官であったアドルフ・アイヒマンである。彼は、ヒトラーのユダヤ人狩りの命令を率先して実行した人物である。身の毛もよだつ恐ろしい言葉であり冷酷な人物像が浮かんでくる。ポーランドには多数の収容所があり、アウシュビッツ、ビルケナウの二つの強制収容所だけでも110万人以上がチクロンB等の毒ガスで殺害された。ユダヤ人の殺害は600万人にも及んだといわれている。

さて今年、第二次世界大戦が終結して66年になる。戦争の悲惨さは誰もが知りながら、現在世界各地で砲火が飛び交い多数の死者が出ている。今から69年前の昭和17年2月、米軍は九十九里浜上陸作戦（コロネット作戦）を練っていた。日本をどのように降伏させるかの作戦で、総司令官はマッカーサーである。米国にある戦争資料には「片貝」の地名が随所に散見される。作戦を実現させるための具体的策として、1945年11月1日九州南部上陸を想定したオリンピック作戦、1946年3月1日関東平野上陸を想定したコロネット作戦が立てられた。そして、45年7月25日ブラックリスト作戦+キャンパス作戦（平和的占領作戦）を立てたが、この時すでに米国は原子爆弾の実験に成功（7月16日）していた。7月26日、ポツダム宣言（米・英・ソ連=日本無条件降伏）を日本は受け入れなかったため、8月6日広島（リトルボーイ=約4ト：死者約14万人）に、9日長崎（ファットマン=約4.5ト：死者約7万人）に原子爆弾が投下された。幻の本土決戦も2発の原子爆弾の投下により7ヶ月終戦が早まった。九十九里浜上陸作戦という作戦がもし実施されていたら大網白里町の戦後はどのようになっていたか、考えるだけで背筋が寒くなる。

ある統計によると、世界大戦での日本人の死者

は300万人を超えている。その昔から「人ひとりの命は地球より重い」と言われてきた。私達もそう思いたい。



茂原市に残る掩体壕（飛行機格納壕）

2度目の被災地支援から

津波のいった家
落ちた天井に衝撃
を受ける



3:40で
止まった時計
大川小学校



7月7日、まちサポでは、会員やお当番さんを募って被災地石巻に行ってきた。避難所となっている湊小に傾聴ボランティアと支援物資を持って2度目の訪問です。前回行ったときにはまだ電気が来てなかったのですが、電気が来たとの情報に扇風機2台と、ハエの大量発生でハエ取りリボンが欲しいとの要望でハエ取りリボン・ハエたたき、夏物衣料を届け、大変喜ばれました。

今回は、仮設住宅に移られた平塚さんに、津波にのまれた自宅を案内していただきながら、目の前のお母様を助けられなかった無念な思いをお話していただきました。午後からは、たくさんの児童が犠牲になつてしまった大川小学校へ行ききました。途中、参加したみんなの花を買って花台に手向け、みんなでご冥福を祈りました。この学校の惨状はこの惨状より痛々しく感じられ、参加した全員の心に深く刻み込まれたようです。



津波の威力に驚いた大川小

考察 新しいコミュニティのあり方(II)

まちサポ理事 三澤清隆

1. コミュニティに関する公の見解

総務省のコミュニティに関する対策要綱では、「モデル・コミュニティ地区の範囲は、おおむね小学校の通学区域程度の規模」とした。また、コミュニティの概念について、国民生活審議会調査部会コミュニティ問題小委員会中間報告は、コミュニティを「生活の場において、市民としての自主性と責任を自覚した個人および家庭を構成主体として地域性と各種の共通目標を持った、開放的でしかも構成員相互に信頼感のある集団を、われわれはコミュニティと呼ぶことにしよう」(1969年)とした。

また、「コミュニティ」は、生活の場における人間回復の「場」として重要であり、「コミュニティは、個人や家庭のみでは達成しえない地域住民のさまざまな要求を展開する場として、取り残された階層を含めて人間性の回復と真の自己実現をもたらすもの」、とし「コミュニティにおける人間的交流の深まりは、有意義な精神生活と文化的生活を実現するための一つの契機である。」と指摘している。

一方、コミュニティ研究会報告(1977年)では、「地域社会という生活の場において、地域社会の主体者としての権利と責任を自覚した住民が、共通の地域への帰属意識と、共通の利害と、そこでの役割認識に立って、共通の行動を目指そうとするその態度の中に見出される連帯」だとした。

2. コミュニティの構成

これらの考え方から、コミュニティは二つの構成要素を持っていることが解る。一つは空間的領域としての「地域性」であり「地域社会」

に関わる意味合いがある。

もう一つは人々が社会的共同生活を営む場としての「共同性」であり、共通の利害関係に基づいて人為的につくられる組織など「機能性・協働性」が特徴的だ。今日的に捉えるとたとえば自治会・町内会、多様なNPOによる社会的ネットワーク組織。行政・社会福祉協議会などの機関とボランティア団体NPOとを結ぶ中間支援機関、あるいは市民活動サークルなどである。

いわゆる自然発生的にとどまらない、今日的要請によって必然的にできた「協働活動が行われる社会²⁾」という概念である。

コミュニティは、われわれが普段よく使う言葉だけに、文脈において強調する場合の参考としたい。(以下、次号に続く)

1 > ①基礎自治体の主権が及ぶ地域社会。

②多様な地域住民が、住民自治・住民協働を推進する形態の包括的地域資源(たとえば自治会の地域づくり。多様な人々が参加する地域づくりのネットワーク化。ソーシャル・ネットワーキング・サービスのSNSなど)。

2 > 同じ考え方や関心を共有している人々がつくる社会。

石巻から子どもたちが来ます。

大網ひまわりネットでは、8月5.6.7.8日の3泊4日で33人の親子をディズニールランドにご招待する事になりました。大里綜合管理会社さんのご協力で、石巻湊小の子ども達の夢を叶えてあげようと、実現にこぎつけました。当町役場職員組合さんをはじめ多くの方から支援金をいただいています。ありがとうございます。



まちさぼでは、これからも被災地に向けて支援を続けていきます。引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

大網白里まちづくりサポートセンター

大網白里町大網 32-3

<http://machisapo.net>

TEL/FAX ; 0475-72-8278

E-mal:info@machisapo.net